

支え合い

医療介護連携で研修会

チームアプローチ学ぶ

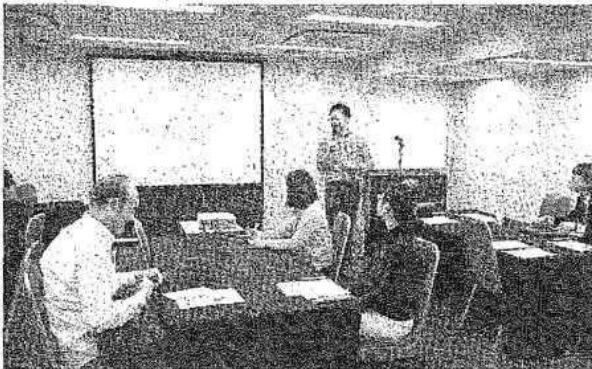
高齢者の生活の質(QOL)を向上させたいと、セミナー「医療と介護連携のためのチームアプローチ」が11月26日、横浜市内で開かれた。老年医学専門医で、やまと在宅診療所大崎(宮城県大崎市)の大蔵暢院長が講演。高齢者の医療は「早く治して健康にする」というより、病気や障害がありながらも、より長く、より良く生きることをサポートすることが使命」と指摘し、そのためには本人を中心に、家族、医師、看護師、ケアマネジャー、施設スタッフら多職種が連携し、チームアプローチを行う必要があると強調した。

NPO法人「高齢者を支える学

地域から

実際のチームアプローチ推進ネットワーク(ミンガンネット)(辻彼南雄理事長)が主催し、県内や都内の看護師、ケアマネジャーら約20人が参加した。

著書「老年症候群」の診察室(朝日新聞出版)がある大蔵さん



老年症候群と医療介護連携について講演する大蔵暢さん ー横浜市神奈川区

は、各臓器の機能低下が複雑に絡み合って発症する老年症候群などについて解説。虚弱高齢者の医療介護は、医療的問題だけでなく、心理的問題、社会的問題も影響し合っており、多職種の連携がなければ十分に対応できないとした。

多職種チームは「フラットな関係のクモの巣型のネットワークで情報を共有し、患者さん第一で明確なケアのゴールを立てる必要がある」とし、高齢になればなるほど余命には限界があるが、食べたいものを食べるといったQOLには「まだ伸びしろがある」と訴えた。

事例研究も行い、実際のケースから多職種連携の成功点、失敗点を検討した。大蔵さんは「チームアプローチは、いかに日常業務でやっていくかが課題」と強調した。

(熊谷 和夫)